

嘘つきは本当に悪い人？

みなさんは、至極当然だと思っている自分の「常識」を疑った経験はあるだろうか。そして、自分の「常識」はなぜ常識たりうるのかと問うたことはあるだろうか。僕がフィールドで直面することになった二つのエピソードを紹介しようと思う。

除草の約束

僕はフィールドで嘘をつかれた。初めてカメルーンに長期滞在し村人と一緒に仕事をした時の話である。二週間ほど一緒に働いてくれていた村の若い男性に畑の周りの除草作業を頼んでいた。ところが、約束の翌朝、仕事をするために畑に行ってみると、おや、相変わらず雑草が繁茂しているではないか。風邪でもひいたのだろうか。昼飯時に畑から戻ると、彼は僕の家で待っていた。謝りにでも来たのか、と思った次の瞬間、彼の口から思いもよらぬ言葉が飛び出した。「除草をしたから賃金を払ってくれないか?」。僕は自分の耳を疑った、と同時に頭に血が上ってくるのを感じた。そう、彼は正々堂々と嘘をついたのである。水掛け論になってもいけないので、除草の確認をするためとして彼と

一緒に畑に行くことにした。しかし、彼は全く動揺する素振りを見せない。その自信満々さは、もしかしたら僕の記憶が間違っているのかもしれないと不安にさせるほどだった。いざ、畑に到着する。間違いなく、除草はされていない。と、彼に確認しようとする、彼は何事もなかったかのようにその場でせっせと除草を始めたのである(写真①)。もうすぐ終わるから先に支払ってくれないか、とまで言い出す始末である。僕は最早、開いた口が塞がらなかった。

嘘をつくということ

ここまでの話を読むと、彼を悪い人だと考える人がいるに違いない。少なくとも僕はそう思った。嘘をつくのは信用ならない人だという固定観念があったし、そう信じて疑わなかった。ところが、何か妙な感じが残ったのである。そのしこりの正体を彼と別れた後につらつら考えてみる。先ず、嘘をついているというのに悪びれた様子がない。むしろ平然としている。謝ることもない。それどころか、何事もなかったかのように楽しそうに草を刈っている。大体、そんな嘘をついたところでバレてしまうのは時間の問題だろう。にもかかわらず、なぜそんな分かりきった嘘をつく必要があったのだろうか。僕は一カ月ほどしばらく考えていた。

それ以降も彼との関係が続く中、注意深く観察していると、彼はどうやら疑り深い性格らしいということが分かってきた。しかも、それは彼だけではない。他に一緒に働く村人も似たような所を持っていた。しかし、誤解はしないでほしい。彼らはみな陽気で気持ちの良い人たちだし、いつも楽しく一緒に働いている。ひねくれ者なんかではないのだ。ある日、そんなモヤモヤを現地で一緒に仕事をする信頼できる人物にぶつけてみた。すると、彼はしばらく考えた後にこう

答えた。「過去に自分があるいは家族が、外部者によって騙された経験があったとしたら、お前は外部者にどう反応するか。当初の約束と違うことをされた経験があったり聞いたりしたことがあれば、お前はどのような行動を取るだろうか。」はっとした。もし自分がそのような体験を重ねていたら、相手が本当に支払ってくれるかどうか怪しいと思っているのだとしたら、先ず相手を確認しようと思うのが自然だろう。海のものとも山のものとも分からない外部者が相手なの



写真①何もなかったかのように除草を始める村人

だ。たとえ嘘をつくという行為だとしても、それによって相手を確かめられるのであれば、身を守れるのだとしたら、村人の行動を理解はできる。質問に答えた彼がそこまで意味したかどうかは分からないが、カメルーンは他のアフリカ諸国に違わず、植民地時代という苦難に満ちた経験をしてきた。その後、勝手に引かれた国境線で区切られた「国」として、社会が成熟する時間もないままに、独立を果たした。そのような歴史の中では色々な騙しあいがあったかもしれない。家族が、あるいは知り合いが酷い目に遭ったのかもしれない。その中で自己防衛手段として、「嘘」という手段が存在するのだとしたら、単に嘘つきは悪い人、と断罪していいのであろうか。除草を頼まれた彼が一体どういうつもりだったのか、本当のところは確かめようもないし、誰にも分からない。それでも、彼らが背負っているものに寄り添って理解しようと努力することで、想像をふくらませられる。自分の価値観だけで判断しては、せっかくの素晴らしい出会いを台無しにしてしまうかもしれない。フィールドでは、相手を理解しようとする姿勢や想像力が求められる、と強く実感させてもらった体験であった。ところ変われば自分の「常識」が通用しない、という大前提が必要なのである。

いったいどこが畑なの？

続いては、「畑」に関するエピソードだ。みなさんは「畑」と聞いたらどのような風景を思い浮かべるだろうか。僕は、作物が畝に整然と列をなしている様子が目に浮かぶ。僕は畑の土壌養分に関してカメルーンまで調べに来たので、まずは村のどこに畑があるのか、車で走りながら一生懸命見まわしてみた。が、そこには藪か草っ原しか見えない。家の周りに少しトウモロコシが見えるだけで、とてもそれだけで食料を賄えているとは思えない。そこで、畑はいったいどこにあるのか村人に聞いてみた。すると、なんと僕が藪や草っ原だと認識していたところが、実は彼らの「畑」だと言うのである(写真②)。早速案内してもらうが、山刀を片手に「畑」に入っていく。藪を切り開いて進む中、よくよく見てみると確かに色々な作物が植えてある。しかし、畝も無い平らな所にごちゃごちゃ植えてあって、とてもじゃないが管理されているようには見えない。言葉は悪いが、何となく気分で色々な種を適当に蒔いたように、当時の僕の目には映った。ラッカセイやキャッサバ、トウガラシ、バナナ、オクラ、パパイヤ、タロイモ、それに何か良く分からない樹木がたくさん。この彼らの「畑」を僕は何という言葉で表現できるだろうか。同じ「畑」という言葉で表されるにもかかわ

らず、僕と彼らで思い描く風景は全く異なっていた。

畝を作る必要はあるのか？

では、なぜ自分の知っている畑では畝を作るのだろうか。色々理由はあると思うが、湿害を防ぐための排水改善や、どこにどの作物があるか管理をしやすくする整理整頓のため、といったことを耳にしたことがある。しかし、カメルーンの

土をよくよく調べてみると、元々水はけが非常に良いことが分かってきた。日本ではほとんど見ることのない真っ赤な色をした「オキシソル」という土壌が広がっているのだが、この土は気の遠くなるような長い時間、風雨に晒されてできた土である(写真③)。元々あった栄養分はほとんど洗い流されてしまった代わりに、流れにくい鉄分が残された。鉄は空気中に長い時間置いておくと錆びてしまうが、この錆びの色が土を赤くしている。そういう土はふかふかしている



写真②これが畑？

水が浸透しやすいという性質を持つ。したがって、畝を作らないのは、彼らが怠惰なわけではなくて、元来排水のよい土である為に、必要がないのかもしれない。

整然としている必要があるのか？

管理のしやすさという面であるが、僕から見ると無秩序に植えてあるのだが、彼らはどこに何を植えているかしっかり記憶、認識しており、

いつどの辺の作物が収穫期になるかを把握しているのである。メモを取っているわけではないので、正確に記憶しておくのは到底不可能であろうと思われるのだが、確かに日々家族の食料を確保している。「畑」に行く途中には、樹や草など彼らなりの目印があるらしいのだが、熱帯で旺盛に生長する植物の姿は日々変わりゆき、僕にとっては一カ月前に通った同じ道も全く違う景色に映る。彼らとは受け取れている情報の質がまるで違うのだ。僕が同じ地点にたどり着



写真③赤土

くためには、GPSに頼らざるを得ない。このように、我々にとっては雑然としていても、彼らにとっては何の問題もない。それが、彼らの畑の在り方だったのである。ともすると、だらしのない畑、と評価されかねないのだが、畝を作る必要がないのと同じように、限られた労力を他の事に分配する彼らなりの工夫なのかもしれないのだ。

自分の常識を疑い、自分と向き合う

以上二つの例でみてきたように、フィールドでは僕自身の知っている常識が全く通用しなかった。嘘つきは悪い人、畑は畝を作って整然としているもの、といったような自分の世界の固定概念で彼らを判断するとどうなるのか。一歩間違えれば、不真面目でだらしのない人たちというレッテルをも貼りかねないという怖さを実感した。そこにある土壌や気候といった環境も、また、彼らの生き方や辿ってきた歴史も、どちらにも注意を払わなければ彼らのやり方を理解することはできないようだ。相手の気持ちになって考えてみましょう、なんていうのは想像以上に難しく、自分は自分が思う以上に自分の常識にとらわれていた。これはもう感覚的なものなので、自分が身をもって実感しない限りはなかなか理解できないように思う。学校で習う

知識はとても大切だが、それらをもって、フィールドで起こる自然現象や人々の暮らしについて自分自身がどう感じるのか、どう思うのか、想像力を働かせてみることで、初めて生きた知識になるような気がしている。そして、相手を知ろうとすればするほど、逆説的だが今度はそのベクトルが自分に向かってくる。異文化と触れることは自分自身と向き合うことになるのだ。それが面白い。自分が自分を知らないことに気付く。自分の常識はどうして常識たりうるのか。なぜ自分はそういう風に考えるのか。そういう自分を形作ってきたものは何なのか。違う世界に飛び込むことで初めて浮き彫りになる。フィールドに行くことで、却って勉強しなければならないことが増えるのだ。フィールドで土の研究をしようと思うと、数学や理科だけでなく、自分や相手が背負っている社会背景の知識も必要だし、それを伝えるだけの国語力と語学力も必要になる。それらを自分の頭の中でつなぎ合わせて想像力を膨らませながら相手や自分と向き合うのだ。いったん自分の知らない世界に飛び込んだ時、嘘つきが悪い人とは限らないのである。

柴田誠